

令和5年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

校訓「夢・発見・実現」のもと、社会・地域に根付いた総合学科高校として、生徒の興味・関心に応じた各系列での多様な学びを通し、豊かに暮らすためのスキルを身に付けさせるとともに、学校全体での人権教育・生徒支援・生徒指導・キャリア教育・教科指導等を密接に連携させた支援・指導を行い、自己敬愛の心で協働できる人材を育成し、生徒一人ひとりの「進路実現」を具現する。

- 1 多文化共生の土壌をいかし、自分と異なる背景を持つ人との交流を通してソフトスキルを養い、柔軟で寛容な心を持つ多様な人材を育てる。
- 2 ICTや先進設備を活用し、コアカリキュラム「ドリカム」を中心とした総合学科の学びで、コミュニケーション能力や課題解決力を育む教育を実践する。
- 3 生徒それぞれが持つ力を伸ばすとともに、「子ども・若者育成支援推進法」に基づき、地域との連携を軸として、社会・地域に愛される態度を培う。

2 中期的目標

- 1 「夢・発見・実現」—自己の具体的なキャリアビジョンを設定し、実現に向け粘り強く継続する力をつけるキャリア教育を推進する—
 - (1) 「ドリカム授業」をコアカリキュラムと位置づけ、全ての授業との関連を持たせつつ、自分で考え自分の言葉で表現できる生徒を育成する。
 - ア 3年間を見据えたグループ学習等を通じて生徒の多様な出会いや体験を通じて自分の将来像を描く中で、ソフトスキルを養い、自尊感情や社会的有用感に富んだ人間性を育成し、生徒に自己実現させる。
 - イ 3年生課題研究において、自分が選んだテーマを研究し、文字で自分の考えをまとめたり、プレゼンテーションしたりする経験を通じて、視野を広げ伝える力を育みながら、自らの個性・生き方を磨き、自らの進路を切り開く力を育成し、生徒に自己実現させる。
 - ウ 授業やその延長上にある大会・コンテスト・検定等に積極的にチャレンジし、生涯を通じて学ぶ力を身につけさせ、幅広い進路を確保して、生徒に自己実現させる。
 - (2) 「総合学科」の特徴を活かし、「ちいさな総合学科」らしい進路を含めて、進路決定率90%（R02：88%、R03：88%、R04：87%）をめざす。
 - ア 多様化が進む社会で、障がいの有無や年齢、文化的・言語的背景、家庭環境等にかかわらず、誰一人取り残すことなく、かつ誰もが生き生きとした人生を享受できるよう、自らとは異なる立場や地域にいる人々と接する機会や異なる環境に身を置く機会を意図的・計画的に設定し、すべての人の人権を尊重する心を養う。
 - イ 進路ガイダンス、オープンキャンパス、企業訪問への参加の機会を設定し、生徒が次の進学先・就職先について体験を通して知る機会を作り、全生徒の進路希望を明確化する。
 - ウ 学校外の協力も積極的に導入し、生徒の学習意欲を向上させ、基礎学力を入学時よりも伸ばすことで多様な進路を保証する。
- 2 「夢・発見・実現」—総合学科らしさ溢れる授業を通じ、社会情勢や課題の本質を理解し、変化の時代を生き抜く力を育成する—
 - (1) 生徒の実態等に基づき、基礎学力を定着させるとともに、興味関心・進路希望に応じた教育内容を創造し、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア 新学習指導要領の確実な実施に向け、総合学科としてカリキュラムの充実を図るとともに、授業内容を工夫して生徒の学ぶ力を向上させる。
 - イ 学び直しや少人数展開授業の実施等により、文章読解の力など基礎学力の定着を支援し、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - (2) 主体的・対話的で深い学びを実現した授業づくりを進め、生徒の学ぶ力を向上させる。
 - ア デジタルトランスフォーメーションを活用した授業改善および実践を通じて、個々の状況やニーズに応じたより良い教育環境を構築する。
 - イ 「主体的・対話的で深い学び」の推進のため、校内研修や授業見学等を行い、教員全員が相互に実践を共有して生徒の学ぶ力を向上させる。
- 3 「夢・発見・実現」に打ち込める学校—安全で安心な学びの場で、社会・地域・人との繋がりを大切に、互いに助け高め合える力を育成する—
 - (1) 全生徒が安心・安全を実感できる学校生活を送ることで、自己実現や社会性の獲得を促すための意図的・計画的な生徒指導を行う。
 - ア 生徒が自発的・主体的に自らを発達させることを意識し、その過程を学校や教職員が支えていく発達支持的生徒指導を重視する。
 - イ 生徒一人ひとりが安心・安全を実感し、落ち着いた日常生活を送ることができるよう、保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒指導を行う。
 - ウ 自己の言動や生活態度をより好ましいものにするよう自問自答する中でソフトスキルを養い、社会に受け入れられるための自己実現や社会性の獲得を促すとともに、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する。
- 4 「夢・発見・実現」のための連携—地域をはじめとしたさまざまな連携および多文化共生を推進し、生徒が生き活きと活動できる場を提供する—
 - (1) 生徒一人ひとりをサポートする人権教育・生徒支援の一層の充実を図り、生徒の不安を解消する。
 - ア 保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援を行う。
 - イ 学校行事や交流活動等の生徒が生き活きと活動できる場を、3年間を見通した計画の中で提供する。部活動については引き続き重点項目とし、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する手立てとする。
 - ウ 障がいのある生徒や外国にルーツのある生徒等のアクセシビリティの向上を図るとともに、学校全体で取組みを進展させる。
 - (2) 教職員が学校経営計画のもと志を一つにし、ソフトスキルを率先して養い、互いに協力し合う中でチームとして機能する職場づくりを推進する。
 - ア 全ての教職員が適切かつ丁寧な支援を行えるよう情報共有を密にし、カウンセリングマインドを持って、生徒の気持ちに寄り添いながら、生徒が安心して相談できる相談支援体制の充実を図る。
 - イ 校内研修やディスカッションを通して経験の少ない教員のOJTを図り、併せてミドルリーダーの育成を図る。
 - ウ 年齢構成等、教員集団の現状を踏まえ、教職員一人ひとりの意識改革と学校全体のチーム作りを図り「働き方改革」に取り組む。
 - (3) 絆づくりと活力あるコミュニティの形成により地域とのつながりを充実させる。
 - ア これまで培ってきた幼保小中大との連携、地域連携のネットワークを基盤に、地元根づいた「開かれた学校」づくりを一層推進する。
 - イ 学校運営協議会および学校教育自己診断等を活用しつつ、保護者や地域のニーズを反映した学校改善に取り組む「豊川教育コミュニティネット」の一員として、生徒と地域との協働を進め、総合学科高校としての情報を積極発信する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和5年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
働き方改革で業務量を削減する中で、生徒：29項目中27項目、保護者：23中19、教員：36中29が向上。全体として好評価である(生徒は22項目で肯定値が80%以上)。ただ生徒の「学校・授業が楽しい(わかりやすい)」は75%・74%と昨年比で各2%上昇しているもののまだ相対的に低い。教員はそれに対して教育活動を日常的に話し合うことを更に強化したものが20%以上で肯定値は94%。教え方の工夫・改善や生徒保護者の意見聴取等についても取組みを増やすなどして肯定値も高い。迎合ではない「わかりやすさ・楽しさ」につながる学習の工夫が一層求められているが、教員が全体で話し合う機会が減ったとした人権については、生徒の「豊かな心や人の生き方」の項目での2%の低下を招いている。他の内容を維持しつつの+αは難題だが、「ちいさな総合学科」の中で、ソフトスキルの向上を全体のレベルアップにつなげる挑戦を今後も効果的に継続する。	第1回(6月14日開催) ・多様な生徒を受け入れ、活動させるためのカリキュラムの変遷に興味がある。昨年度のコスモスの課題研究発表を見たが、すばらしかった。コスモスの生徒と一般の生徒が一緒になって出前授業に参加し、共生する内容の発信をするといいいのでは。また、学校の強みとして、コスモス生と一般生の繋がり方をみてもらえば良いのではと思う。 ・中学校の教員も同じように業務の多様化・多忙化の影響を受けて疲弊していると感じている。その点についても、情報共有して働き方改革を進めていけたらと考えている。 ・福井高校も多様化しているが地域も多様化している。外国の方もどんどん入ってきている。多くの工場や企業も地域に入ってきており、今後も開発が進んでいくと思う。ともに発展させたい。 ・地域福祉を担当していると、障がい者手帳はないものの学習・就職に困難さを抱えている人が多いと気づく。高校でも同じように困り感を持っている人がいれば相談して欲しい。また、夏休みな

府立福井高等学校

	<p>どに市役所でのお仕事体験も可能。引き続き連携していきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが福井高校に入学して良かったと言っている。学校だけでなく家庭面でもサポートをしてくれているため漏れなく生徒が活動できている。PTA ができることはしていきたい。 ・3年卒業文集などの作成をしてみてもどうか。福井高校にきて良かったこともそうでなかったことも書き留めて目に見える成果を示してみてもどうか。現在は効率よく外部連携を行っているため、教員の勤務状況も今のところどうにか収まっているとも思うが、学校側が色々な制度や連携を使ってサポートしていることを保護者に示すことができればよいとも思う。ただ、学校が管理しなければならない事案が多すぎる。教員のみなさまの健康第一を願っています。 <p>第2回（11月8日開催）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「小さな適応指導」については、非常に良い取組みであるが教職員の共通理解が必要。フリースクールとの連携については課題もあろうが引き続き検討して欲しい。不登校の生徒については、内規で別室登校を認め、そこでの課題について評価することなども検討して欲しい。 ・地元の高校として頑張っていたら嬉しい。 ・生徒数が減ることは悪いことだけでない。人数減少は地域の子どもの数が減っているのだから当然のこと。地域の学校として、生徒が減って空いたスペースを地域とともに使うスペースにはできないだろうか。空いたスペースを利用して、たくさんの世代の方との交流がもてる場としてはいかかか。 ・「小さな適応指導」については保護者目線でもとても嬉しい。別室で年の近い学習支援員との交流をすることなどができれば、とても良いと思う。居場所がある、話を聞いてくれる別室があることは、不登校の生徒が学校に行こうとするきっかけとなるとも思う。 <p>第3回（11月8日開催）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学時代に心配していた生徒が元気に通学している姿を見て安心した。福井高校は地元が無くてはならない学校。大変だが、教職員は健康に留意して今後とも支援・指導にあたって欲しい。 ・通信制高校が人気なようだが、学校はリアルな人間関係を教育するところから降りてしまっている。府立高校は地元ともつながりつつ、具体の人間関係の大切さを学べる場所として頑張りたい。地元と連携して学校経営を進めるとともに、DXについても意欲的に取組もうとしていることを評価する。 ・茨木という地域には市民に主体的な実行力がある。能登半島地震に対しても茨木の消防団は組織的に継続的に現地での支援活動を行っている。生徒には指示待ちではなく、自ら行動する実践経験を積んで欲しい。茨木市には「おにクル」もできた。生徒たちには、そういう場所も使って地元とつながりつついろいろな経験を積んで欲しい。 ・不登校生徒を安易に通信制へつなぐことは、本当にその生徒の将来につながるのか。単に高校卒業の資格が得やすいというだけで学校を選ぶのはどうか。日々登校して教室でいっしょに学ぶことが大切。ただ、生徒・家庭と学校だけでそれを行うことは難しだろう。地域（の行政資源等）も生徒や保護者との関係性を作って、生徒の学びや家庭を支えるので、学校も生徒の課題をしっかりキャッチして、地域との情報共有・連携しての支援を、今後ともどうぞよろしく。 ・1年間を振り返って、保護者の立場から感謝「ありがとう」。大人の意識と子どもの意識は違っている。子どもの世界は、大人の世界以上に日々進化し、ニーズも変化していると思う。先生も大人だが、子どもの世界について、先生たちが日々アップデートしようとしていることがありがたい。福井高校の良さを発信して欲しい。 ・学校の自己診断の結果はすばらしい。 ・いじめへの対応について、生徒が「満足」とする数字が80%を超え、教員が100%頑張っていると回答していることは良い数字。ただ、その数字に満足させず、今後加害者やその保護者が否定することがあっても、「いじめ」には臆せず対応することを続けて欲しい。 ・福井高校を支えてくださる地元中学校や地域に感謝。これほど地域に面倒を見てもらっている高校はそうそうない。近しいとお叱りをうけることもあるが、それを含めてありがたいこと。 ・福井高校など地元とのつながりを大事にし、地域のニーズにこたえようとしている学校がもっと大事にされるべきだ。大阪府は府立学校に人が集まるような施策をより充実させ、福井高校など、地域にこたえようとする府立学校の良さを府民のみなさんに広く知ってもらえるような仕組みを作って欲しい。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R4年度値]	自己評価
夢・発見・実現 キャリア教育の推進	<p>(1) コアカリキュラムのドリカム授業で夢を発見させる</p> <p>ア、体験型の学習機会の充実</p> <p>イ、主体的に参加し発表する学習機会を充実させ、発想や計画が実現することを実感させる</p> <p>ウ、各種挑戦の奨励で実現力を応援する</p>	<p>(1)</p> <p>ア、多様な社会人との出会いの場や体験・実習を設け、グループ学習等でリアルに進路や生き方について考えさせ、ソフトスキルを養うとともに、自己有用感を向上させ「夢」を「発見」し「実現」へ向かわせる。</p> <p>イ、3年生の課題研究でのドリカムフェスタ：総合学科発表会が集大成となるよう自分でテーマを見つけ、自分の言葉でまとめ、他者の意見を聞いてより広く深く思考したうえで発表する経験を繰り返す中で、自己肯定感を向上させ、ポジティブに生きるための取組みを充実させる。</p> <p>ウ、大会・コンテスト・資格等への挑戦を奨励し、前向きな目標を設定して努力する姿勢を育成する。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、自己診断アンケートの「進路や生き方」についての肯定的回答：90% [89%]。</p> <p>イ、総合学科アンケートの「総合学科で学んでよかった」の肯定的回答：90%以上維持 [95%]。</p> <p>ウ、競技団体や認定団体等主催の大会・コンテスト・資格等に挑戦したものや校内での取組みが優秀であったものへの「福井高校賞」授与者数について100名以上を維持する [221名]。</p>	<p>(1)</p> <p>ア、ドリカム授業のほか、各教科でのペアワーク・グループワークを活性化させ、保育・福祉の実習など直接進路にかかわる授業はもとより、人権行事・HR活動等でもコミュニケーション力などソフトスキルの向上に努めた。91% [○]。</p> <p>イ、ドリカムフェスタは3学年を体育館に集め、保護者のほか来賓・周辺校教員等にも見ていただく形で開催し好評であった。他者の意見を聞くためにアンケートやインタビューに取組んだ姿も多くあり、1・2年生もそこをめざして頑張っている。97% [◎]。</p> <p>ウ、陸上部で近畿大会に出場したもの、英検で準1級を取得したものをはじめとし、各自がそれぞれの目標に努力している。それを評価しての授与者も多数。212名・1グループ [○]。</p>

府立福井高等学校

	<p>(2)「ちいさな総合学科」での進路実現 ア、日々が多文化で他者理解が必要な環境を強みにした総合学科の学び イ、直近の進路も大切に学ぶ</p>	<p>(2) ア、日本語指導の生徒や障がいがある生徒などとも共に学んでいる本校の環境を生かし、年齢・性別・文化・言語・志向など種々の違いを意識する学習機会をさらに設けて、他者理解を深め、誰もが生き生きと暮らせる社会をめざす学習を行う。 イ、特徴ある本校での学びを、次のステージでも継続できるよう、自己実現できる進路を見つける参加・体験の機会を提供・推奨する。</p>	<p>(2) ア、自己診断の「環境・多文化」・「豊かな心や人の生き方」の項目について各 85% [80%・84%] イ、自己診断の「進路や生き方」と「進路や奨学金」の項目について各 90% [89%・85%]</p>	<p>(2) ア、理科が全般に実験・観察の機会を増やしたことで、外国ルーツ生徒の母語でのスピーチを聞く機会を設けたことなどで「環・多」85%。一方「豊・人」は2年の値が伸びず82% [△]。 イ、ドリカムキャリアの授業+進路行事+外部への見学推奨等の効果と丁寧な進学資金計画で91%・89%。2つあわせて [○]。</p>
<p>夢・発見・実現 変化の時代を生き抜く確かな力の養成</p>	<p>(1) 基礎学力の定着と興味関心・進路希望に応じた授業 ア、新学習指導要領の中で、生徒に則した「ちいさな総合学科」の最適化 イ、少人数展開授業・文章読解・学び直しの内容の向上 (2) 主体的対話的な授業による学習意欲の向上 ア、授業改善の取り組み イ、学習力向上のための研修の実施</p>	<p>(1) ア、将来も地元に残る生徒が多いことも踏まえた「ちいさな総合学科」の特徴を創る。生徒の興味関心やキャリア形成に有用な科目設定・授業展開精選し自己実現を支援する。 イ、全教科で読解力の育成と学び直しの要素を取り入れた授業を行い、ドリカム授業やHRではアンガーマネジメントの内容を盛り込みつつソフトスキルを養う。 (2) ア、引き続き観点別評価や ICT 活用の有用化を進めつつ、近い将来にはデジタルトランスフォーメーションを活用した授業改善および実践も行えるよう授業力向上プロジェクトを充実させ、生徒の学習力を向上させる。 イ、教員相互の授業見学や研究授業を実施するとともに、各教員の目標に「主体的・対話的」な授業の工夫を設定し、実践を検証する。</p>	<p>(1) ア・イ、総合学科アンケートの「総合学科で学んでよかった」の肯定的回答:90%以上維持 [95%]。 ア・イ、自己診断アンケートの「他の学校にはない特徴」の回答:85% [83%]。 (2) ア、自己診断アンケートの「授業が分かりやすい」の回答:80% [72%]。 イ、自己診断アンケートの「教え方の工夫」と「他の先生の授業見学」の回答:各80% [79%・78%]。</p>	<p>(1) 授業アンケートの結果を見るに、概して実技・実生活にかかる学校設定科目の評価が高い(福祉・保育・芸術系・体育系・英会話・自動車など)。地理概論・政経・実用数学など日常生活の疑問や困りごとを高校生のお話で基礎から学んだ科目の満足度も高かった。順に97%・93% [○]。 (2) 授業のわかりやすさについては、教員は努力しその様子も生徒に伝わっている様子だが、1%しか伸びなかった。選択科目では一定の自己肯定感も育ち、主体的に取り組み、表現することを楽しむ様子も見えているので、特に生徒が苦手科目を避けられない1年の必修科目で、知識・技能の点で安易に模範解答を求める傾向を、主体的に考えることに導くことなどをさらに工夫する必要はある。ア、73% [△]、イ、84%・85% [○]。(2)としては [△]。</p>
<p>夢・発見・実現 安全で安心な学びの場の確保</p>	<p>(1)安心・安全を実感できる生徒支援・生徒指導 ア、自発的に基本的な習慣と社会性の確立に向かわせる支援・指導の充実 イ、いじめの防止や早期発見への取り組み強化 ウ、保護者に学校がア・イの取り組みを進めていることの周知と理解の促進。 エ、普段の学校生活の中でのリアルなコミュニケーション力の向上を、相手を思いやり、命や人権を大切にする姿勢につなげる取り組みの充実</p>	<p>(1) ア、学習に限らず、基本的な生活習慣や社会性の獲得についても、達成可能なスモールステップを提示し支援して達成させ、その後は自発的に成長することを促す。 イ、リアルな場でも、SNS等の場でも、些細に見えることからでもいじめに発展することを踏まえ、また多対1の関係に始まりがあることを意識して生徒を見守り、少しのことでも訴えがあったり良くない状況が感じられたりする場合には、教員間で情報共有し組織的に対応する。 ウ、保護者に向けての文書並びにメール等での情報発信強化。あわせて、懇談のほか行事等の機会をとらえての対面・対話を短時間でも確保する。 エ、教員はあいさつや呼名など、日々たくさんある機会を大切に、種々の声掛けを意識的に行う。また日々の授業や行事・部活動等での生徒相互の対話的取り組みの場を増やし、支援・指導を繰り返し、互いを思い理解する力を養い、意思疎通の力をつけさせるとともに、いじめ防止などにもつなげていく。</p>	<p>(1) ア、自己診断アンケートの「基本的習慣の確立」・「指導は納得」の回答:各80% [80%・74%]。 イ、自己診断アンケートの「いじめへの対応」の回答:100% [80%]。 ウ、保護者の自己診断アンケートの「生徒指導方針に共感」の回答85% [82%] あわせて「方針や情報の提供努力」の回答90% [88%]。 エ、自己診断アンケート「命の大切さ・ルール・人権」の回答:90% [87%]。</p>	<p>(1) ア、基本的な習慣と社会性の確立は通年重要事項とした。コロナ禍にかかる制約が大幅緩和された5月以降、リアルな人間関係にかかる内容を大切に。指標は目標を超えたが、自発的な成長に至らなかった生徒がまだ残っている。83% [○]・75% [△]。 イ、いじめにかかる対応については訴えがあったこと、学校が把握したことには即応し、意見が異なる関係者にも理解と協力を求めた。課題の性質上100%回答は不可能かもしれないが、未発見の課題が必ずあることも意識して82%では [△] とする。 ウ、時期を逸せずメール発信をし続けたこと等で提供努力は認めていただいたと考える。一方、生徒支援・指導については過剰過少・強弱など相反するご意見を伺う。81%・92%、共感が低下したので [△]。 エ、総合学科で時間ごとの入れ替わりが多いこともあり、都度の関係を良好に行う力はずきつつあるが、コロナ禍での経験の中断もあり、リアルな関係について修復力の養成や特定の強い言葉への意識を養うことなどが今後必要。87% [△]。</p>
	<p>(1)生徒一人ひとりをサポートする教育活動の充実</p>	<p>(1) ア、職員研修等で教員各自ならびに生徒連携委員会・保健室等の生徒を支援する組織力を向上させる。 イ、保護者・中学校との連携を深めるとともに、校内でのSC・SSW・CC・居場所事業者との情報共有・協働支援を強化し、校外でも茨木市子育て担当課・福祉担当課・ユース事業者・茨木警察等との間で進んでいる連携などを、さらに他市や他の地域関係機関等にも広げる。ア・イあわせて校内外で生徒一人ひとりへのサポートを充実させる。 ウ、コロナ禍で縮小してしまっている体育祭・文化祭・修学旅行等の行事を、生徒</p>	<p>(1) ア・イ、自己診断アンケートの「学校に行くのが楽しい」の回答:75% [73%]。あわせて「先生は相談に親身」・「気軽に相談できる先生」も各80% [81%・69%]。 ウ、自己診断アンケートの「行事は楽しく工夫」の回答:80% [78%]。</p>	<p>(1) 楽しい・親身は満たしたが、気軽が4%向上したものの不達。気軽には「いつでも」の意もあろうが、その面が満たされていないとも判断する。外部機関との連携とあわせて、校内の相談者・時間の確保が課題。ア・イ、75%・82%・73% [△]。 ウ、体育祭・文化祭・修学旅行ほか各行事ともほぼ制約なく行えた。体育祭では障がい</p>

<p>夢・発見・実現 地域連携と多文化共生の推進</p>	<p>の実状にあわせて一体的に再構築する。</p> <p>エ、同じく縮小してしまっている部活動を部活動大阪モデルなども活用して生徒の自尊感情や継続的に努力する力を養うものとして再構築する</p> <p>オ、障がいがある生徒や外国ルーツの生徒と他の生徒の関わりについて、日々の関係が教員を介さずとも増えるよう生徒を支援・指導する。</p> <p>(2)互いに協力しチームとして機能する教員集団</p> <p>(2) ア、本校では教科指導・分掌業務などで、教員の業務が細かく分化している傾向があるので、多くが現在担っているあるいは経験したことがある担任業務を共通項として相互に助け合うことなどを通して、学校の組織力を高める</p> <p>イ、授業力の向上に加え、分掌業務等でもデータの保管場所を整理したり、OJT などをするなどして業務改善に努める。</p> <p>ウ、会議等の時間管理や資料のペーパーレス化、あわせて類似する業務の一本化や分掌間での相互の業務理解などを進めることで働き方改革を推進する。</p> <p>(3)地域との絆づくりと活力あるコミュニティの形成</p> <p>ア、地元に基づいた「開かれた学校」づくりの一層の推進</p> <p>イ、地元の保幼小中学校園ならびに大学との連携強化</p> <p>ウ、地元の協力を得て、進路未決定者にも支援者・支援機関の確保</p> <p>エ、地元からのニーズが高い多文化共生についての協力強化</p>	<p>の实状にあわせて一体的に再構築する。</p> <p>エ、自己診断アンケートの「生徒会・部活動活発」の回答 80% [75%]。</p> <p>オ、教室移動や食事の場面で、ともに過ごす様子の増減で判断。外国ルーツの生徒については、あわせて自己診断アンケートの「共に学ぶ環境」の回答 85% [84%]。</p> <p>(2) ア、自己診断アンケートの「先生はお互いに協力」の回答 85% [80%]。</p> <p>イ、自己診断アンケートの「先生は責任を持って」の回答 85% [82%]。</p> <p>ウ、職場のストレスチェック値：110 以下 [121]。</p> <p>(3) ア～エ、自己診断アンケートの「地域の人々や校園などと交流」の回答 80% [75%]。識字・日本語教室 30 回維持 [30] 回。保幼小中学校園等への出前授業 10 件 [8 件]、交流事業参加 15 件 [12 件]。年間を通じて相互の関係が継続する大学・専門学校 3 校以上 [3 校]。</p> <p>イ、「福井高校を育てる会」の地元中学校や「豊川ネット」との連携を強化し、出前授業や交流行事、また研究授業等に積極的に参加する。あわせて大学・専門学校等の研究やインターンシップなどに協力するとともに、本校の教育活動も支援していただく。</p> <p>ウ、「キャリアパスポート」等の取組みについて、小中学校との連携を深めるとともに、必要な生徒については、本校からの進路先へも発展的に継承する。</p> <p>エ、日本語指導が必要な生徒のための選抜実施校であることを生かし、茨木市や地元校園・地域等の要望を受けての多文化共生の取組みに協力する。</p>	<p>がある生徒の参加について工夫し、福祉施設の方に見学していただくことも再開した。文化祭は日本語指導生徒が活躍するプログラム等もあり交流や多文化共生を広げる機会となった。81% [○]。</p> <p>エ、生徒会・部活動については、生徒会が各行事やドリカムフェスタを運営するなど意欲的に取組み、陸上・ダンス・軽音楽なども活発に活動している。合同部活動で頑張っている野球部などもある。ただ全体的に入部者が減少。コロナ禍で活動制限があった期間に働き手不足を補ったアルバイトが定着してしまっている。アルバイトとの両立が課題。71% [△]。</p> <p>オ、障がいがある生徒についてはほぼ全体の中にとけ込んでいる。外国ルーツ生徒の「共に学ぶ」も 87% [○]。但し障がいがある生徒・外国ルーツの生徒から見たときには、更なる交流を望んでいると思われる(特に常時介助者が必要な車イス利用の生徒)。一層進展させたい。</p> <p>(2) ア、2・3年生を合同職員室とし1年生は2人担任制とした。体制を変えて担任業務を軸に働き方改革を進めることをめざしたが、生徒にもより良い効果があったと見え指標が7%向上した。87% [◎]。</p> <p>イ、生徒の疑問・質問や相談にしっかり向き合うとともに、信用を失う行為を行わないよう取組んだ。悩み相談や進路相談等についても、すべて良い結果を出せたわけではないが、生徒に一定の満足を生み出したと考える。86% [○]。</p> <p>ウ、コロナ禍明けで業務に変化があり、また1年生の出身中学・通学範囲が広がるなど、物理的には業務が増える環境の中でストレスチェック値はまだ高域だが11ポイント低下した。引き続き低減をめざす途中経過としての110 [○]。</p> <p>(3) 指標のアンケート結果は77%で [△]。但し、回数の指標はすべて満たしている。識字・日本語:30回 [○]。出前授業:14件 [○]。交流事業:36件 [○]。年間継続:3校 [○]。また、それぞれに参加している生徒の延べ人数も200人を超え、各出前先・交流先等からの評価も良い。陸上部・バスケット部等は地域の中学とも合同練習をし、福祉系列の生徒の中には府の福祉部が行った福祉人材募集ビデオに出演したものもいる。ただ生徒アンケートの数字が伸びないのは、参加生徒が偏っていることにある。独りであるいは特定の少人数で、専らSNS上での関係内にとどまっている生徒を、まずは校内、続いて地域へとリアルな人間関係につなげていくことで、地域連携・多文化共生も深化させることを課題とするが、今年度の(3)としては[○]。</p>
----------------------------------	--	---	---